

ひとと空間を科学する

topic
1

台湾ハウジングワークショップが行われました

期 間：2015年8月24日 - 9月6日
開催地：淡江大学（台湾）

台湾ハウジングワークショップとは、台湾の淡江大学Kuang Chein Bee准教授と、住居学科篠原聡子教授が中心となり、毎年日本、台湾交互に開催しているハウジングワークショップです。10回目となる今年は、淡江大学(台湾)、逢甲大学(台湾)、天津大学(中国)、西安科技大学(中国)、武漢大学(中国)、日本女子大学の計6大学・3か国から学生70名、教員10名のもと開催されました。

今年のワークショップの課題では、都市部において様々な社会的背景により定住しないライフスタイルに注目が集まっており、短いスパンで住まい手が変わっていくことを想定した“中間の(Transition)住宅”がテーマとして掲げられました。

学生は10グループに分かれ、半分は台北の都市部を敷地に、半分は台北の郊外を敷地に設計に取り組みました。各グループ、エスキース、2回の中間講評会、最終講評会に向けて議論をかわし作業を進めていきました。各国の価値観の相違、個人個人の設計に対する考え方の相違に戸惑いながらも、英語でのディスカッションを積み重ね、毎日食住を共にすることで絆は深まり、設計も後半に近づくにつれ順調に進んでいきました。

ワークショップの特徴の一つは、2年生から修士まで参加するところにあると思います。学年を越え、国を越え交流することで、2年生は敷地調査や設計の進め方を学ぶことができ、3、4年生は海外の学生のレベルを知り自分のスキルアップにつなげることができ、修士の学生はグループをまとめる力を養える機会となったのではないのでしょうか。

最終講評では、どの班も2週間の集大成を発表することができたと思います。都市部を敷地とした班は、周辺の緑との関係を再考した案や伝統的住宅の要素に着目した案が見られました。一方、郊外を敷地とした班は、現代における遊牧の生活スタイルの案やコミュニティ形成を促進する案が見られました。

大学院1年 塩澤 瑠璃子



エクスカーシオン

参加した学生の声

今年で台湾ハウジングワークショップは10周年を迎えました。今年のテーマは10周年を節目とするにふさわしいテーマであり、台湾、中国の建築家、先生方、隈先生のレクチャーを聞く機会を得られたことも私たち学生にとって貴重な体験でした。

(ワークショップリーダー 大学院1年 塩澤 瑠璃子)

4年生になり、初めて台湾ワークショップに参加しました。外国での開催にとても緊張していましたが、和やかな雰囲気の中、台湾の学生や先生方のきめ細かい気遣いで充実した2週間を送ることができました。

2週間という短い期間で国籍や文化、言語の違う学生と1つのものを作るという経験に、始めはどのように進めていいのかわからず戸惑いましたが、同じアジア圏でありながらも社会背景や生活様式に多くの違いがあるということを知り、そこから湧く他国の学生の発想や設計のプロセスに、次第にディスカッションをするやり甲斐を感じていました。どのグループも、作品の完成に至るまでかなりの苦労と時間を重ねたと思います。しかし、最後の講評会では全グループが違う提案をしていて、それぞれのグループの個性になっていました。このワークショップを通して、周囲には自分よりも建築を好きな人が沢山いて、世界には自分よりも熱心で技術のある人が何人もいるということ強く実感しました。

これから卒業制作の設計が本格的に始まろうとしています。その前にこの経験をする事が出来るととてもよかったと感じています。これらを糧に今後良い作品を作るよう日々努力していきたいです。

(篠原研究室4年 武田 基杏)

こんなにもめまぐるしい時間は、人生で初めてでした。普段の何倍もの時間起きていたのに、普段よりもスピードを感じた2週間でした。それだけ、このワークショップが充実していたということだと思います。

多くのことを学びました。まず、台湾や中国の学生と一緒に設計をするにあたり、言葉で伝えることに必死で、自分の頭で建築を考える余裕がありませんでした。中国や台湾の学生に比べ自分には、自分の考えやデザインを人に伝える表現スキルも足りず、というゼロだということを実感し、今後の課題となりました。グループでのディスカッションでも、他大学の学生が建築の勉強を本当にしっかりしているということ、そして何よりもみんな建築が好きというがよく分かり、私ももっと勉強したいと素直に感じました。

メンバーと濃厚な2週間を過ごしたからでしょうか。帰国後もワークショップでできた友達の話ばかりしています。建築を通して、異国の文化・生活や考え方を肌で感じ、同じ経験を通じた人間関係は一生ものだなと感じています。このような機会を得たことを感謝しています。

(宮研究室3年 小林 奈七子)



作業風景



最終講評風景

2015年9月に開所したJWUほうめいこどもクラブに 専用のロッカーと下駄箱を制作しました！

2015年9月より、豊明小学校の子どもたちが通うJWUほうめいこどもクラブという学童保育が開所しました。定行研究室では、クラブの開所のプロセスに関わり環境のセッティングを行っています。また、院生の修士論文として調査に協力していただいております。その一環で、子どもたち30人分のランドセルと靴を入れる棚が市販のものでは適当なものが見つからなかったため、研究室のメンバーで制作することになりました。考えた家具を設計し造り、実際に使用してもらう、という貴重な機会をいただきました。



完成したロッカー



実際の制作時には、定行先生をはじめ、10人近くの学生が電動ドライバーを片手に作業しました。

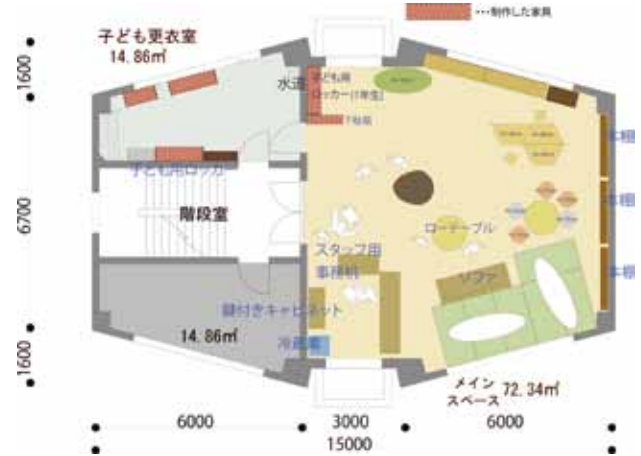
設計・図面作成→木材購入→磨き作業→
組み立て→ペンキ塗り→ワックスかけ



組立作業の様子

という工程を経て、ロッカーを3つと、下駄箱をそれぞれ作り上げました。豊明小学校の子どもたちは登下校の際に帽子をかぶっているため、ロッカー 1人分のスペースの中でどこに配置するか、という設計段階でも非常に苦労しました。現在は子どもたちが実際に使用してくれています。

大学院2年 高橋 さやか



九十九里コミュニティヘルスケア夏期セミナー 2015 『ヘルスケアのまちづくり』に、住居学科から、 佐藤研究室の中村 沙樹子さんと篠原研究室の樋渡 彩華さんが参加しました。

九十九里コミュニティヘルスケア夏期セミナーでは、二日間を通して、生活支援、地域ケア、予防・保健、在宅医療という4つのフィールドでそれぞれのテーマを持ち、ヘルスケアの視点から九十九里のまちづくりについて考えました。各フィールドの視点から、実際に地域で生活する一般の住民や医療従事者・農業団体の方など様々な方にインタビューをし、統計資料などの数字には表れない、人々が問題と感じていることや、住民のこの町に対する意識を知ることができました。このセミナーには看護・薬学・医学を学ぶ生徒が多く参加しており、建築の分野からは本学からの2人のみ参加しました。他分野の学生と共に、ひとつのまちを考えたこのセミナーでは、私が普段気に留めないことを、他分野で学んでいる学生が自分の分野から考えていることや、反対に福祉・医療を学ぶ学生とは違う視点でまちづくりや人に対して考えている自分に気づくなど、多くの発見があったセミナーでした。

インタビューで「あなたにとっての健康観・幸福観とはなんですか」という質問に対し、フィールドや職業や年齢に限らず、多くの方が「誰かとつながっていること」と答えていたのが印象に残りました。人と人がつながりながら自分らしく生活できるまちづくり考えるために、建築・医療・福祉といった、異なる分野を学ぶ人も互いに協力し、関係を持ちながらそれぞれの視点を持って思考していくことが必要だと感じました。

大学院2年 中村 沙樹子



篠原研究室が担当したフィールド「新規移住者」でのインタビューの様子。



フィールド先で得た情報を地図に落とし込みながら議論する学生たち。